

教員の資質力量形成に関する基礎研究（３）

「放課後学習チューター事業」の分析を通じた教員養成の課題と展望

A Pilot Study of Developing Teachers' Pedagogical Qualities and Abilities (3) :

With a Specific Reference to Issues and Perspectives of Pre-service Education

through an Analysis on "After-school Tutorial Project"

鈴木尚子 仁田玲江

Naoko SUZUKI

Akie NITTA

吉岡久美子 山下政俊

Kumiko YOSHIOKA

Masatoshi YAMASHITA

島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター紀要第3号

平成16年3月

「教育臨床総合研究紀要3 2003研究」

教員の資質力量形成に関する基礎研究(3)

「放課後学習チューター事業」の分析を通じた教員養成の課題と展望

A Pilot Study of Developing Teachers' Pedagogical Qualities and Abilities (3) :
With a Specific Reference to Issues and Perspectives of Pre-service Education
through an Analysis on "After-school Tutorial Project"

鈴木尚子* 仁田玲江**

Naoko SUZUKI

Akie NITTA

吉岡久美子*** 山下政俊****

Kumiko YOSHIOKA

Masatoshi YAMASHITA

要 旨

本研究は、平成15年度に文部科学省から委嘱・実施された島根県の放課後学習チューター事業の実践過程を分析し、本事業を通して見えてきた教職志望学生を学校現場に派遣する際の支援の在り方、地域・学校現場と連携した教員養成の在り方、児童・生徒・学生の学習意欲向上につながる支援の在り方、について報告・提案することを目的としている。

[キーワード] 放課後学習チューター事業、実践的指導力、教員養成、コーディネート

I. はじめに

今、日本の教育現場は、生徒指導面からの問題にとどまらず、学力の低下、教員の指導力不足についても指摘され、あらゆる角度からの様々な問題を抱えている。その背景には、地域・家庭・学校の三者の連携の在り方が要因の一つとして考えられている。これまでも文部科学省は、「学力向上フロンティア事業」等の支援施策を講じてきているが、保護者の間では依然として子どもの学力低下への不安が根強い。また、地域と学校の連携を図るために、開かれた学校、特色ある学校づくりを目指しているが、地域の特性も異なり、学校外の人々の人材確保が難しい等の状況下であり、地域と学校との連携の在り方も現在模索されている。

このような状況を踏まえ、文部科学省は確かな学力の向上を目指した「学力向上アクション

* 島根大学大学院教育学研究科学校教育専攻

** 松江市立朝酌小学校

*** 松江市立朝酌小学校

**** 島根大学教育学研究室

プラン」を打ち出した。そして、個に応じた指導の充実・習熟度別指導などのきめ細かな指導を実現すべく施策の一つに、平成15年度から2年間の調査研究期間を設けた「放課後学習チューター事業」が全国で実施・展開されている。この事業の趣旨は、放課後の学習相談をはじめとした児童生徒へのきめ細かな指導を一層充実させ、学習上のつまずきの解消や学習意欲の向上を図るとともに、教職志望学生の将来の教員としての資質・能力の向上につなげる等の観点から、教職志望者等を「放課後学習チューター」として活用するための方策等についての実践的な調査研究である。

本研究の目的は、島根県の放課後学習チューター事業初年度の実践事例をもとに、個に応じたきめ細かな指導が生まれる過程を明らかにしていく。そして、この実践過程の分析を通して、教職志望学生を学校現場に派遣する際の支援の在り方、地域・学校現場と連携した教員養成の在り方、児童・生徒・学生の学習意欲向上につながる支援の在り方、について報告・提案していく。

Ⅱ．島根県における放課後学習チューター事業の展開

島根県は、3校の指定校をもつ。朝酌小学校（児童数：101名、学級数：7、教職員数：13名）津田小学校（児童数：768名、学級数：25、教職員数：36名）そして、第二中学校（生徒数：891名、学級数：26、教職員数：58名）である。本研究は、朝酌小学校での実践成果を分析し、それをもとに放課後学習チューター事業を通じた教員養成の課題と展望について提案していく。

1．放課後学習チューター事業の実施

(1) 実施形態

朝酌小学校に配属した学生の属性は、中途参加した学生を含めて10名である。尚、本研究の第1執筆者は、朝酌小学校のチューター・チームのリーダーでもある。

表1 学生の属性

	学年	課程	所属研究室	備考
A(男性)	2	教員養成	社会科	1 / 19から参加
B(女性)	3	教員養成	幼児教育	10 / 14から参加
C(女性)	3	教員養成	教育学	教育実習(10月)
D(男性)	3	非教員養成	心理学	
E(女性)	3	非教員養成	心理学	1 / 19から参加
F(男性)	3	教員養成	数学科	教育実習(11月)
G(女性)	4	教員養成	家政科	副実習(12月)
H(女性)	4	教員養成	国語科	副実習(10月)
*I(女性)	M2	教育学研究科	学校教育	*リーダー(第1執筆者)
J(女性)	M2	教育学研究科	英語教育	

(2) 展開する際の課題と配慮

放課後学習チューター事業の主たるは、チューターではなく、学校の中で生活する子どもたちであり、放課後は、その学校生活を支える縁の下の力持ち的時間である。学校の大きな動きを崩すことなく、(1)つまずきの克服、主体的な学び、学習意欲の向上、学ぶ習慣の定着、(2)教職志望学生の実践的指導力の育成、の2点が初年度実施の目標にある。

チューターの中には、学校現場へ初めて臨む不安、教育実習と同じように一斉授業をしなくてはならないのだろうかという緊張、教員でも教育実習生でもない不確かな立場への不安定さなどを抱えている者もいた。これらの不安要素を克服するために、まず、チューター同士の人間関係づくり、そして、学校の学期・月毎の行事予定表、児童の名簿、生活時程・時間割をいただき、学校の大きな流れを把握していくことにした。

2. 展開する際の「連携」方策

(1)「チューター通信」～保護者からの理解・信頼を得るために～



図1 チューター通信

学生は、大学での講義、実習(教育実習、副免実習等)があり、週に1回しか参加できない学生もいる。週2回の学習サポートでは、短期間に子どもとチューターとの人間関係を深めることが困難であると判明した。そこで、たまにしか会えない者同士が、お互いの存在を認識し、仲良くなるための有効な手段はないのかと考える。そこで作成したのが、チューター通信である(図1)。この通信は、次の3点を目的としている。

- ① 子どもたちはどんなチューターがいるのか知ることができる。
- ② 保護者は学校の取り組みや、チューターの存在を知ることができる。
- ③ 地域・保護者-学校-チューターの三者の連絡・情報交換・連携を図る。

子どもとチューターが週2回しか会えないように、チューター同士もまた大学で毎日会えるわけではない。チューター通信を作成することによって、チューター同士がお互いを知り、仲良くなる手段にもなった。

（2）「ぐんぐんステップカード」～児童とチューターの意思疎通を図るために～

子どもたちの意識、学習の状況の記録をとっておくために、子ども一人ひとりがもつ個人カードの作成案が事業実施当初から挙げられていた。担当教員とリーダーとの話し合いにより、「子どもたちがぐんぐんのびていきますように」という願いをこめた「ぐんぐんステップカード（図2）」ができあがった。（尚、このカードは、鳥取県の中学校教諭（音楽科）の実践事例を参考に、第1執筆者が小学生用に改訂したものである。）

	月 日()	月 日()	月 日()	月 日()	月 日()
今日の学習活動の内容					
楽しくできましたか	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △
いっしょにがんばれましたか	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △
よくわかりましたか	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △	◎ ○ △
感想・気づいたこと					
次回の計画					
チューター・サイン					

図2 ぐんぐんステップカード No.1

学習サポート終了5分前に、子どもたちはカードを用いて、その時間内に取り組んだ学習内容の振り返り、次回の学習計画を記入する。記入後、各自でチューターに手渡し、挨拶をしてから下校する。そして、カード回収後、チューターの第2の仕事が始まる（図3）。

放課後に子どもたちと学習する時間を「実践」とするならば、カードを回収して子どもたちの感想・振り返りを読むことは、チューターにとっての重要な「振り返り」となる。つまり、子どもたちの感想・振り返りは、チューターにとってその時間内の教え方を反省・吟味する一助となるのである。同時に、カードを通して、子どもの名前と顔が一致してきているかどうかの確認にもなった。

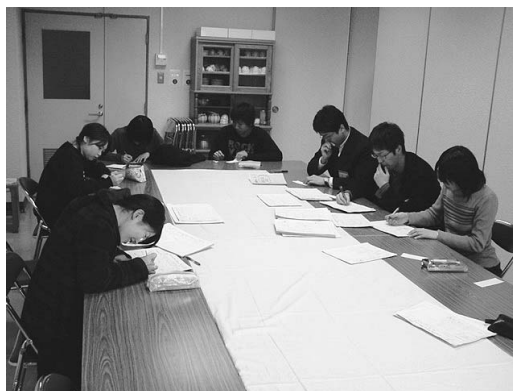


図3 放課後学習サポート後の様子

学習サポートの時間内に、チューター1人がきめ細かくサポートできる児童数は多くて約5～6人である。つまづいている問いについて、きめ細かく教えていくと、必ずしも全員の子どもに対してきめ細かく教えたことにはなりにくい。そのため、このカードを通して言葉のやりとりをしながら、放課後の学習時間内に密にできなかった関係を作り出す一つの手段としたことである。具体的に述べると、子どもたちは、チューターとの紙面上での対話を通して、

子どもたちは次回への学習意欲を高めていく。そして、チューターと共に学習することを楽しみに待ち望むようになっている。

書き言葉による対話を通して、子どもたちは自分の思いを他者にわかりやすく伝える文章力・表現力をぐんぐんと伸ばしてきていることが判明した。同時に、チューターのコメントを書く表現力も豊かになってきた。カード自体が、子どもとチューターの表現活動のポートフォリオとなっており、子どもとチューター自身の日本語表現力の成長を振り返ることができていると考えられる。

(3) チューター意見交流日記～教員とチューターの意思疎通を図るために～

島根県では10月から始まった事業だが、秋田県では既に6月から実施・展開している。大学から配布された記録カードはあったが、担当校とチューターとの話し合いにより、秋田大学の記録形式を参考に、試験的に記録用紙を作成した。ところが、実際に記録用紙を使ってみたところ、10月は記録することよりも、ディスカッションしていくことがチューター同士の振り返りと意見交換には適していることがわかった。このディスカッションの中には、複数の教職員からのコメント・指導もあった。

学習支援を体験した直後に、チューターと教職員とでチューターの体験したことの振り返りができる。そこから出てきた疑問・課題・要望をリーダーがまとめて、担当教員と話し合った。そして、その話し合いの内容をまたチューターに伝達していく形態をとった。

体験直後にするディスカッションはチューター自身の振り返りに有益だと見られたが、形に残らない。そこで出てきたのが、後に振り返るための記録の必要性、学生の意見・感想を全教職員が把握したいという要望、であった。

出案されたのが「チューター意見交流日記」であった。これは、主に学生が、毎回の学習サポート後に感想・意見・要望を記入するものである。その後、次の学習サポートまでの間に、教職員が回覧し、コメント・指導・要望を記入し、それを学生が読み学習サポートの一助とした。



図4 チューター・ミーティングの様子

(4) 教員とチューター間のコーディネート～教員とチューターの連携を図るために～

チューターと教員との連携があつてこそ、放課後の学習サポートが安定して行われることができる。10月から実施された事業を振り返ると、改めてチューター担当教員とリーダーとの連携の重要性が認識されている。学校外部の人々(大学、学生等)が連携し、協同して実践研究を行うためには、学校と学校外部をつなぐコーディネーターの存在が必要不可欠となる。朝酌小学校での実践は、チューター担当教員と、チューターのリーダーである第1執筆者がコーディネーターとしての役割を担いながら、チューターと学校からの計画・要望等を調整していった(図5-a)。

そして、学校からの方針に取り組むために、チューター同士で話し合いながら、「学ぶこと

の楽しさ、学習意欲・学びの質の向上」に向けて、子どもたちへの学習サポートや授業サポートを実践していった（図5 - b）。

チューターは、学校の目指す子ども像に向けて子どもたちの学習支援をしながら、同時に、子どもたちの学習支援をする一教員としての意識が養われてきた（図5 - c）。子どもたちの学習サポートを通して、チューター自身もまた、学ぶことと教えることの楽しさ、学習意欲・学びの質が高まってきている。

放課後学習チューター事業のみならず、外部関係者が学校現場に関わる際に、その関係の質を高めるためには、それぞれの人間関係が非常に重要な要因になると考えられる。朝酌小学校は、学校組織はもとより、地域・保護者との関係も密な学校であったため、安心して放課後学習チューターとして学生が学校現場に入っていくことのできる環境であった。

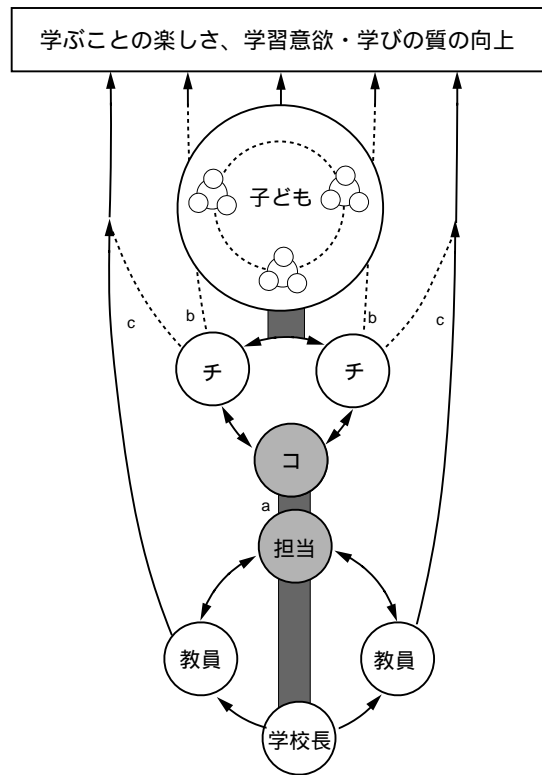


図5 チューターと学校のコーディネート

（5）チューター・ミーティング～チューター同士の仲間づくりのために～

8月に出会ったばかりのチューター同士の人間関係が、10月から始動する放課後の学習サポートに向けて何をすべきか。それは、チューター同士の人間関係づくりである。10月は、主に子どもとチューター同士が仲良くなる人間関係づくりの期間としている。子どもと仲良くなる前に、チューター同士が仲良くなっていくことが必要だと考えられた。そこで、子どもたちと仲良くなる活動を、チューター同士でシミュレーションしていった。こうして、チューター同士の基盤ができ、子どもたちと仲良くなっていくことができるようになった。

チューター・ミーティングは、講義等で全員で集まることが困難なため、学習サポート後の短時間にすることにした。ここでは、毎時間の学習サポートで気づいたことを話し合っ、みんな意見交流をしていくようにしている。この短時間のミーティングの中で、報告・連絡・相談ができる仲間に成長し合える関係づくりを促している。

Ⅲ．放課後学習チューター事業の過程分析と今後の課題

1．平成15年度の実践過程の分析

ここからは、放課後の学習支援を「学習サポート」、そして後述する授業中の学習支援を「授業サポート」と言い換えていく。まずは、10月からの実践してきた学習サポートの過程について、次のように分類・分析した（表1）。

表1 平成15年度放課後学習チューターの実践過程

月	日	対象 学年	活動	ねらい・意図	課題	過程	
8	25		放課後学習チューター説明会				
9	12		担当校への挨拶訪問・顔合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ・担当校の方針を知る ・教職員・学生同士の親睦を深める 	出会いの大切な時期と教育実習が重なる	出会い期①	
	17		チューター・ミーティング				
	21		チューター・ミーティング				
	22	全	全校生徒へ挨拶、チューター通信配布				地域/学校との理解・信頼作り
	24		全体ミーティング				<ul style="list-style-type: none"> ・ルールの周知・統一 ・個人カードの作成
26		チューター・ミーティング					
10	②	3・4	ランチルーム(以下ラ)	<ul style="list-style-type: none"> ・チューターと子どもお互いが知り合うオリエンテーション ・学校の全体像を知る 	学習形態・学習内容	出会い期②	
	⑥	3・4	図書館				
	⑨	5・6	ラ				
	⑭	5・6	図書館 新規チューター1名加わる				
	⑯	1・2	ラ				
	⑳	1・2	図書館				
21		単独・木曜日の打ち合わせ			子どもとチューターの関係をよりよいものにしていくための手だて	試行期・創作期	
23	4~6	ラくぐんステップカード開始	[くぐんステップカード]	<ul style="list-style-type: none"> ・学習/教え方の振り返り ・出欠確認 			
27	1~3	ラ教育委員会からの視察					
11	⑥	4~6	ラチューター通信	[チューター意見交流日記] 情報交換を密にする	時間の有効活用	試行期・創作期	
	⑩	1~3	ラチューター意見交流日記開始				
	⑬	4~6	ラ				
	⑰	1~3	ラ				
	⑳	4~6	ラ体育館：漢字ビンゴゲーム				学習意欲の向上を目指す
27	1~3	ラ					
12	①	1~3	ラクロスワードゲーム		子ども数に対しチューターの人数配分・配当	安定期・試行期	
	3		全体ミーティング	個に応じた指導の実現を目指して、学級での学習サポートを試行する(後に授業サポートへと発展させる)			
	④	1~3	教室(以下ク)				
	⑧	4~6	ク表彰				
18	1~3	ク表彰					
1	⑱	4~6	ク全体ミーティング 新規チューター2名加わる	学校全体を知る為に、新規チューターを優先にクラス配当する		試行期	
	22	1~3	雪の為に中止				
	26	4~6	ク				
28		授業サポート開始			授業サポートのシフト表作成の必要性 ・授業サポートできるチューターの日程調整 ・授業サポートする担当クラス教員との連携	試行期・交替期	
30	1~3	ク一日授業参観	[授業サポート]	<ul style="list-style-type: none"> ・学習サポートと連結 ・個に応じた指導の実現を目指す ・実践的指導力の育成 ・採用前研修の一助 			
②	4~6	クチューター通信					
⑤	1~3	ク					
⑨	1~3	ク					
⑫	4~6	ク					
⑯	1~3	ク					
19	4~6	体育館：スポーツ大会	2・3回生のチューターへの引継ぎ(平成16年度に実践を継続していく基礎づくり)				
23	1~3	体育館：スポーツ大会					
26		6年生を送る会					
3	①	全	全校朝礼			平成15年度終了 次年度への引き継ぎ	
	④						
	⑧						
	⑪						
	15						
19	全	卒業式					

【注】 : 放課後学習チューター日 ラ: ランチルームの略 ク: 教室の略

表1をもとに、平成15年度の放課後学習チューター事業の実践過程を具体的に説明していく。

(1) 出会い期①

放課後学習チューター事業の説明会は8月に実施された。学部生・大学院生それぞれが、事前調査で希望していた校種をもとに、小・中学校に配当された。大学院生を中心にしたチーム編成が行われた。出会い期①は、チューター同士、チューターと教職員との人間関係づくりの時期である。

(2) 出会い期②

いよいよ放課後学習チューターが始動した。

全校朝礼の場で、全児童・教職員とオリエンテーションし、チューター通信を通して、チューターと子どもたちが出会い、仲良くなっていく時期である。子どもたちはチューターがどんな人なのか知りたいため、チューター一人に対して、複数の子どもたちが関わろうとしてきた。

(3) 試行期 ~学習形態の変遷~

[第1段階] ~ランチルームでの全体指導~

学習形態の第1段階は、下学年(1~3年) 上学年(4~6年)に分け、週2回をどのようなローテーションでしていくかが試行された。この学習形態では、下・上学年のもつ発達段階に応じた特性を知ることができ、同時に、全体指導のため、活動的な子どもたちの対応に偏り、つまずきのある子どもや、個別指導の必要な子どもへの対応がしにくいことも見えてきた(図7)。

[第2段階] ~学級の中における集団学習指導~

第1段階の課題を踏まえて、次に試行されたのが、ランチルームではなく、学級での学習形態であった。一学年一クラスであり、週2回の学習サポートは下・上学年に分けたままで行われた。ここでは、学年・学級毎の特性を知ることができ、学級の学習集団を通して、チューターが学習サポートすることが第1段階と比較すると、より個に応じた指導へと近づいてきたように考えられた。

[第3段階] ~学習サポートと授業サポートの循環を通して~

第1・2段階で築いてきた子どもとチューターの学習関係、チューターと教職員との連携、チューターが学校運営の一部として安定してきたため、実際の授業

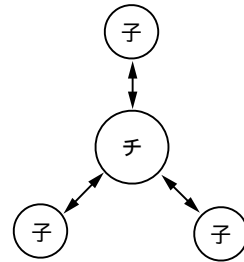


図6 子どもとチューターの出会い

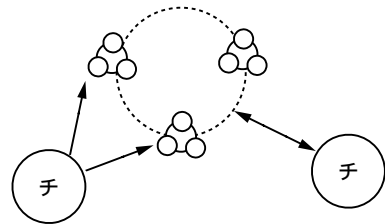


図7 T・Tと全体指導

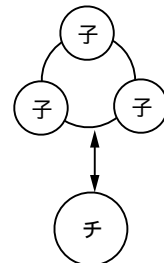


図8 集団学習

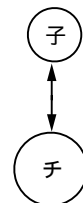


図9 個に応じた指導

の中で学習サポートをしていく「授業サポート」が、1月から試行された。個に応じた指導は、第1・2段階を経てようやく始まった。

授業サポートとは、個別指導の必要な子どもへのサポート(特に算数)、理解に時間のかかる子どもへのきめ細かな対応の必要性、同時に、チューターの実践的指導力の育成を目指して行われる。

授業サポートをすることによって、放課後の学習サポートから見えてこなかった授業中の子どもの姿を実際に見ることができた。このことにより、これまでの学習サポートの質が変わってきた。それは、授業での学びを踏まえた学習サポートの在り方である。授業サポートによって、「全体の中の個」という視点をもちながら子どもたちを見る力がチューターに養われてきていることがわかった。おかげで、つまずいている子どもが苦しんでいる場面に対して、チューターは即座に学習サポートすることができる。チューターからの言葉かけと学習サポートによって、子どもは「先生と一緒に学習してよかった!」と言い、学習意欲を取り戻していく。そうした反応が返ってくる度に、チューターたちもまたつまずきを克服するための指導力を身に付けたいという意欲が高まり、授業サポートの中で教員の実践する授業を熱心に観察していくのであった。

授業サポートをすることによって、学校の現状を把握できるとともに、その授業を参考にし、授業イメージをつくりやすくなることが判明した。「自分だったらどうするか」という視点をもって、指導法・教材分析等を考えることができる機会となってきた。

授業サポートを通して、授業でのつまずきを学習サポートで克服し、学習意欲を向上させて授業へと還元していくことが少しずつ見えてきた一方で、授業を行う教員の授業構成内容についてどこまで意見をだしていいのかという課題も出てきた。

(4) 創作期

学習サポート以外に、様々なイベント活動を企画し、子どもとチューターの間を豊かなものにしていく。そして、この企画を創作していく過程の中で、チューター同士の人間関係もまた築くことができると考えられる。

(5) 安定期

チューター同士の人間関係、チューターと教職員との人間関係が、安定してきた。同時に、子どもたちとの学習サポート関係もまた安定してきた時期である。子ども・チューター・教職員の人間関係の安定を基盤に、新たな学習形態を試みることのできる重要な時期である。

(6) 交替期

3学期は、卒業・修了を控えた4回生・大学院2年生にとって就職等の準備の時期となる。そのため、学習サポート・授業サポートに参加していくことが難しくなる。そこで、3学期の特に2・3月は、2・3回生のチューターたちに、次年度への引継ぎをする「交替期」とする。2・3回生がリーダーシップをとって学校と連携していくことができるよう、4回生・大学院生がサポートし、平成16年度に実践を継続していくためのチューター同士の基盤づくりを目指していく。

2. 平成16年度への課題と展望

(1) 体験・実践の連続性

平成16年度は、平成15年度に試行錯誤を通して築き上げた実践を「検証・改善」し、平成17年度へと「継続」していく吟味の年となる。そのため、年度の節目である平成15年3月から平成16年5月までは、平成15年度の実践を平成16年度へと継続していくための重要な期間となる。

平成15年度の事業初期は、「出会い期①」の次に「出会い期②」となった(表1)。平成16年度4月は、平成15年度から継続するチューター(以下、前チューター)と、新たに加わるチューター(以下、新チューター)のそれぞれにとって、次のように出会い期の質が変わると考えられる。

前チューター：「出会い期②(4月)」「出会い期①(5月)」

前チューターと教職員とで、前年度からの継続課題をもとに、平成16年度放課後学習チューター事業の重要な基盤づくりの時期とする。4月は、新1年生と前チューターとの関係づくりのために、1年生への給食指導をしていく一案が挙げられている。5月は、前チューターと新チューターが出会い、仲間づくりをしていく時期になると考えられる。

新チューター：「出会い期①(5月)」「出会い期②(5～6月)」

前チューターと学校全体による安定した人間関係を基盤として、いよいよ新チューターを迎え入れていく体制をとる。前チューターと新チューター、新チューターと教職員との出会いが始まる(5月)。チューター同士の仲間づくり、チューターと教職員の関係づくりをしながら、新チューターは子どもたちと出会っていく(5～6月)。その中で、新チューターと子どもたち/教職員との関係づくりをサポートしていくのが、前チューターたちがチューターの仲間づくりをしていく上で担う大事な役割ではないかと考えられる。

平成16年4・5月は、平成15年度の体験と実践を連続して行うための学校基盤づくりをする非常に重要な月となる。前チューターと教職員との連携を密にし、放課後学習チューター事業が学校組織の一部として組み込まれるように協同して学校基盤づくりをし、環境調整をする必要がある。このことによって、新たにチューターが増えても、実践の質を深め、チューター一人ひとりの体験を豊かにしていくことができるのではないかと考えられる。

(2) 実践 - 振り返り - 理論の統合保障

実践と理論の統合において重要な役割を果たすのが、「振り返り」である。学生の自立と実践的指導力を育成するためには、実践と理論をコーディネートする振り返りの役割を見逃してはならない。振り返りは、端に自ら学び続ける教員を目指して自分一人で行うだけでなく、体験を共有した仲間関係の中から、よりよい実践的指導力を高めていこうとするものである。そこには、育てる者と育てられる者の縦の人間関係があり、同時に、共に育ち合う仲間の横の存在がある。実践・振り返り・理論の循

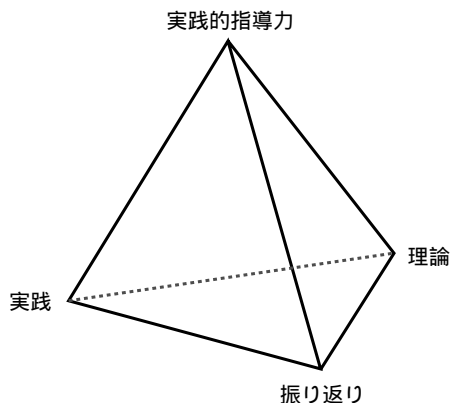


図9 実践 - 振り返り - 理論の統合

環を通して、実践的指導力へと「研ぎ澄ましていく」ことが実践と理論が統合していく上で重要な視点ではないかと考えられる。

(3) 授業サポートの応用

授業サポートは、前述の通り、第1・2段階を経て可能となった個に応じた指導の在り方の一つである。平成15年度は、学校全体の把握から、子ども一人ひとりの学習サポートへと「全体から個へ」という学習形態がみられた。平成16年度は、個に応じた指導にとどまらず、集団学習指導力を高め、最終的には一斉指導力を養成していく学習形態を創り出すことも視野に含めてはどうだろうか(図10)。

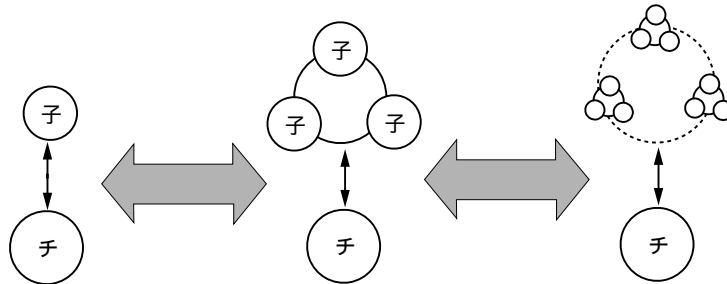


図10 個別指導 - 集団学習指導 - 一斉指導

子ども一人ひとりに応じた指導だけで、学校社会が成り立っているわけではない。一斉指導のできる教員の育成も、教職を志望するチューター一人ひとりに応じたきめ細かな指導の一つとして考えられる。

(4) チューター・チーム同士の連携

他の学校に行っているチューターとの連携は、2月からようやく始まってきた。チューター・チームのリーダー同士で、それぞれの担当学校での取り組み・課題などを話し合い、各学校の進行過程・状況についての情報交換をする。また、新しく入ってくるチューターを受け入れる雰囲気づくりをしていく。

IV. 教職志望学生を学校現場へ派遣する際の支援の在り方の課題

島根県の放課後学習チューター事業の指定校は3校あり、本研究は朝酌小学校の実践をもとに分析したものである。朝酌小学校は小規模校なため、もう1校の大規模校である津田小学校とは学校の体制が異なる。小学校は、学校生活全体を通して子どもの成長を支援するのに対し、中学校は教科からの関わりが非常に強いことが特徴として挙げられる。また、島根大学では高等学校との連携を通して、平成15年度12月から2月までの間、学生を「高校学習支援ボランティア」として高等学校に派遣している。

これまでは、小学校、中学校、高等学校はそれぞれに独立し、連携することが難しい様に考えられていた。小・中・高とそれぞれにおける発達段階に応じた学習支援の在り方、同時に、人間の成長を見通した視野を持つ人材育成が今後重要な課題となると考えられる。つまり、「小学校だから・・・」「中学校だから・・・」と区別して教育を担うのではなく、児童・生徒の将

来像を見通して、今日の前にある状況の中で児童・生徒の成長支援を実行する意識づくりも必要だと考えられる。

V. おわりに ～人材育成・人材確保の保障と展望～

放課後学習チューター事業を通して、学習サポートと授業サポートが循環していく先には、次の可能性が展望として待ち受けていると考えられる。

[教育実習との連結]

教育実習前にチューター経験を有した学生は、学校現場に入ることに慣れ始めていたため、大きな不安を抱くことなく教育実習に臨むことが出来ていた。教育実習を終えて、チューターとして学習サポートをしていくと、教育実習中に行った授業を振り返る一助となった。授業サポートが始まると同時に、教育実習を終えたばかりのチューターたちは、教材分析や授業づくりなどを実際の教員の実践の中から、学んでいくことに役立っていることも見えてきた。

放課後学習チューターは、教育実習を終えた学生を対象とするよりもむしろ、教育実習以前から学校現場に慣れ親しむことを目標として、大学1年生にまで対象を広げたほうがよいと考えられる。

島根大学の教育実習は附属学校園で行われる。本年度の実践を通して見えてきたことには、放課後学習チューター事業と教育実習を連結させるということである。朝酌小学校担当となったチューターは、学習サポートと授業サポートを通して、個に応じた指導から一斉指導に至るまであらゆる指導法を学んできている。こうした体験を体験のままで終わらせず、1年間を通じた教育実習の場として、放課後学習チューター指定校を活用していくことが、学生にとってきめ細かな指導を得やすいと考えられる。

[採用前研修の場]

本年度のチューターの中には、来年度に教育現場に出っていく学生が4名いる。放課後の学習サポートと授業サポートをすることによって、個に応じた指導から一斉指導に至るまで実践することができる。4月からいきなり学校現場に入るのではなく、こうしたチューターという形態の中から学校現場に慣れる場として活用していくことが考えられる。

[スクールサポート制度との連結]

島根県では平成14年度から「スクールサポート制度」を導入している。放課後学習チューター事業を通して、チューターである学生たちは学校の全体像を把握し、子どもたち・教職員との人間関係もまた築かれている。授業サポートにおいては、担任とチューターの役割分担、指導法などが伝達され、実践されている。スクールサポート制度の抱える様々な課題に対応するために、そして、学生の体験を継続させて実績として保障していくためにも、放課後学習チューター事業とスクールサポート制度は連結していく方が得策だと認識している。

[大学院教育の充実を目指した現職教員の活用]

教員養成系大学における大学院教育の在り方が問われている中、大学院生を放課後チューターのリーダーとして活用していくことは、実践と理論の統合に向けた研究者の育成に寄与すると考えられる。

現職教員大学院生は、2年目は学校現場に復帰し、大学から離れて研究に勤しむのがこれまでであった。そこで、これからは、現職教員が勤める学校と大学の架け橋となって、放課後学習チューターとして学生を受け入れ、調整していくことを現職教員大学院生に任せていくことはできないだろうか。附属学校園は多くの教育実習生の受け入れるために、学生一人ひとりに応じたきめ細かな指導をしにくい状況にある。学生の個に応じたよりきめ細かな指導をしていく一案として、現職教員大学院生を活用した大学と学校現場のコーディネート、学生を放課後学習チューターとして送り出し、年間を通じた教育実習の実施が、質の高い教員養成へと寄与すると考えられる。現職教員大学院生の活用は、大学と学校現場の双方の状況を理解していることが、学生と学校現場をコーディネートする際に生きてくる。また、現職教員大学院生の行う実際の授業を通して、実践と理論の統合の在り方を学生に伝達しやすいと考えられる。

大学院生・現職教員の「実践・理論、人・人、人・場」をつなぐコーディネート能力を育成する上でも、放課後学習チューター事業は大きな成果を生み出す一事業であると考えられる。平成16年度は、前年度を踏まえて、客観的に吟味していく必要がある。

約半年間に渡る実践ではあるが、実践過程の分析を通して、学生から実践に対する「充実感」、教育の未来に対する「希望」、限られた中で有益な時間を創り出す「行動力」、そして「学び合う仲間」が認識されてきている。また、現場の教職員の実践や出会いを通して、自分の「目指す教師像」を描きやすいようだ。

来年度は、新しいチューターと教職員組織の中で、今年度の実践を検証・改善していく年になる。目新しくイベント的にやってみるのではなく、試行錯誤の実践、吟味・検証、そして改善の繰り返し・継続を通して、経験を継続させながら近い将来教職員となり得るであろう学生の人材確保・人材育成を目指すこと。そして、実践・振り返り・理論の循環を通して、実践的指導力へと「研ぎ澄ましていく」こと。これらは、近年、教育現場に踏襲される数々の施策全体に、本来求められなくてはならない重要な視点ではないかと考える。

以上が、平成15年度における松江市立朝酌小学校での放課後学習チューター事業の実践から見てきた報告・提案である。来年度は、今年度に見えてきた課題・対策についての客観的な分析を通して、本事業の目指す学力向上に寄与できる体制の在り方を具体化していく必要がある。

本論文を執筆するにあたり、松江市立朝酌小学校の仁田校長をはじめとする教職員の方々、子どもたち、そして、地域・保護者からの理解と信頼に大きく支えられました。秋田大学教育文化学部の姫野講師からは、秋田県での放課後学習チューター事業におけるコーディネートの在り方について意見交流させていただきました。チューターとして学び合う仲間として成長しあっている9名の学生から、本論文について多くの意見と協力をいただきました。島根大学と

島根県教育委員会には、本事業に参加できる機会を与えてくださいました。心より感謝を申し上げます。

参考文献

- 宗像恒次(1989)「健康と病気のストレスモデル」中川米造・宗像恒次編『医療・健康心理学』福村出版 pp.22-46
- 佐伯胖(1996)「『学び合う』学びへ 「学び」の関係論的組み替え」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編著『学び合う共同体』東京大学出版会 pp.145-162
- 佐藤学(1996)「教師の自立的な連帯へ」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編著『学び合う共同体』東京大学出版会 pp.163-171
- 佐藤学(1998)「教師の実践的思考の中の心理学」佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭著『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会 pp.9-55
- 宮崎清孝(1998)「心理学は実践知をいかにして越えるか - 研究が実践の場に入るとき」佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭著『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会 pp.57-101
- 植村勝彦監訳(1999)『コミュニティ心理学 社会問題への理解と援助』
- 鯨岡峻(2002)『育てられる者 から 育てる者 へ 関係発達の視点から』日本放送出版協会
- 文部科学省(2002)「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会(報告)」
- 鈴木尚子・山下政俊(2002)「教員の資質力量形成に関する基礎研究(1) 教育実習を通じたその資質育成プログラム開発」『島根大学教育臨床総合研究紀要』Vol.2 pp.1-15
- 東京都公立学校教職員現職研修制度検討委員会(2002)「自ら学び続ける教員を目指して 人事考課制度と連動した研修体系」『東京都公立学校教職員現職研修制度検討委員会報告書』
- 姫野完治(2002)「協同学習を基礎とした教師教育の課題と展望」『大阪大学教育学年報』Vol.7 pp.47-60
- 姫野完治(2003a)「教師教育における「採用前研修」に対する学生と現職教師の意識」『教育方法学研究』第28号 pp.175-186
- 姫野完治(2003b)「放課後学習チューター事業における教職志望学生の学びの支援とプロセス」『日本教育方法学会第39回大会発表要旨』p.91